

「大伴淡等謹状」

——その政治性と文芸性——

序

天平元年十月、大宰帥大伴旅人は、都にいる藤原房前に「梧桐日本琴一面」を贈るに際して、漢文と和歌とからなる書簡をしたためた。それが『万葉集』巻五に載る「大伴淡等謹状」（以下「淡等謹状」と略す）である。

この「淡等謹状」については、従来、大別すると、出典論的考察と歴史的考察との二方向から追究されてきた。

出典論的考察とは、書簡の構成や表現の多くが、嵯康の「琴賦」や『遊仙窟』『莊子』といった、老荘思想・神仙思想の濃厚な作品の影響下にあることを検証するものである。一般に、そこから敷衍して、旅人が脱俗の境地を述べたとする場合が多い。そうした説の背景には同じ旅人の手に成る「讃酒歌十三首」や「松浦河に遊ぶの序」からの連想も

働いているようである。

こうした考察は、個々の表現の成立を考える上では、重要な意味を持つ。しかし、「淡等謹状」を一個の文芸作品として捉え、それが全体として如何なる意味を持ち、如何なる意図で記されたものであるのかを考える場合には、旅人が記した書簡の文脈を忠実に辿るといふ、より基礎的な作業が必要である。個々の語句の性質や成り立ちの解明を主としてきた従来の出典論的考察では、その総体である書簡の内容自体の考察については、あまり詳論されてはいなかったように思われる。

一方、歴史的考察とは、琴書（琴と書簡）が長屋王の変の八カ月後に藤原四子の一人である房前に贈られているという状況を基に、旅人の琴書献呈の趣旨を推考するものである。

池 田 三 枝 子

長屋王の変に対する旅人の立場については、諸説に顕著な異論はない。

・長屋王の変は武智麻呂を中心とする藤原氏の謀略である。

・反藤原もしくは中立的立場にあった旅人は、変により政治的乃至精神的打撃を受けた。

という二点については、諸説ほぼ一致して認められている。旅人の大宰帥任官を左遷と見る向きもあるが、仮に長屋王の変の布石としての意味があつたにせよ、表立った左遷ではなく、本人の意向はともかく、順当な人事であつたという方向に落ち着きつつあるようである。つまり、長屋王の変に対する旅人の立場については、諸説に大きな相違はないと言えるが、藤原房前については、**①**藤原氏の陰の実力者と見る説と、**②**長屋王の変で実権を掌握した武智麻呂と対立し、冷遇されたとする説に大きく二分される。前者は野村忠夫氏に代表され、養老元年の兄武智麻呂に先んじての参議就任、同五年の「内臣」拜任などから、房前を不比等の実質の後継者、武智麻呂を法的後継者とするものである。後者は高崎正秀氏に代表され、養老五年、房前が長屋王と共に元明の遺詔を受けていること、長屋王の変で動いた形跡がないこと、変以後天平九年の薨去まで昇叙がないことなどを論拠に、房前を長屋王派であつたと見るもので

ある。琴書献呈の趣旨についても、これら両説のいずれを採るかにより、ほぼ次のように解釈が分かれる。

①房前実力者説

A 政治的配慮の要請（埴京請託等）

B 世俗離脱の意思表示

②房前不遇説

C 房前激励もしくは慰撫

D 立場を同じくする房前への心情吐露

まず、**①**房前を陰の実力者とする立場では、Aが、旅人が房前に対して何らかの政治的配慮（大宰帥再任の回避、埴京の願望など）を要請したと見るものである。Bは、政変の敗者である大伴氏の氏上である旅人が、勝者である藤原氏への敗北宣言として、政界離脱・世俗離脱の意思表示をしたとするものである。一方、**②**房前を不遇であつたとする立場では、Cは房前の方に中心を置き、不遇な房前を激励もしくは慰撫することが目的であつたとする。Dは、旅人の心情に中心を置き、不遇な旅人が同じく不遇な房前へ自らの心情を吐露したとする。

右のうち、BCDは、出典論的考察をも踏まえて、「淡等謹状」を老荘思想に基づく脱俗の境地を述べた非政治的な書簡とし、Aのみが書簡に積極的な政治性を看取する。こうした諸説の在り方からして、当該書簡理解の上で、政治

性の有無を問うことは必須の要請であろう。

しかし、房前が陰の実力者であったにせよ、武智麻呂に疎外されつつあったにせよ、「淡等謹状」を解する上での問題は、歴史的事実ではなく、大宰府にいる旅人の目に、都にいる房前がどのように映っていたかということである。

これは書簡の内容自体から読み取るべき事柄であつて、必ずしも歴史的事実と一致するとは限らない。

故に、本稿では、如上の歴史的状況とはひとまず切り離して、先学の出典論を踏まえながら、書簡の文脈を忠実に追つてゆくことにより、旅人の琴書献呈の趣旨について考えてみたい。

一 「淡等謹状」の解釈

大伴淡等謹状

梧桐日本琴一面「対馬の結石山の孫枝なり」

此の琴、夢に娘子に化りて曰く、「余、^①根を遙島の崇き巒に託け、幹を九陽の休き光に晞す。^②長く煙霞を帯びて、^③山川の阿に逍遙し、^④遠く風波を望みて、^⑤雁木の間に出入す。^⑥唯だ百年の後、空しく溝壑に朽ちなむことをのみ恐る。^⑦偶に良き匠に遭ひ、斲りて小琴に為られぬ。質麤く音少なきことを顧みず、^⑧恒に君子の左琴を希ふ」といふ。即ち歌ひて曰く、

いかにあらむ日の時にかも音知らむ人の膝の上我が枕かむ
(巻五・八一〇)

僕、詩詠に報へて曰く

言問はぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしあるべし
(巻五・八一一)

琴娘子答へて曰く

「敬みて德音を奉はりぬ。幸甚幸甚」といふ。片時ありて覚き、即ち夢の言に感け、慨然として止黙すること得ず。故に公使に附けて、いささかに進御る。「謹状す。不具。」

天平元年十月七日、使に附けて進上る。

謹通 中衛高明閣下 「謹空」

「淡等謹状」は、琴が娘子に化成して旅人の夢中に現れ、旅人と対話し、歌詠を交わすという虚構の述作である。人間ならざるものが夢に現れて話をするという、こうした趣向については、「莊子の寓言に類する」(金子元臣氏『評釈』)、「遊仙窟」など神仙譚に做つたもの(窪田空穂氏『評釈』)等、早くから老莊思想・神仙思想よりの影響が指摘されている。

また、表現の上では、嵇康の「琴賦」(『文選』巻十八)に拠る所の多いことが、出典論の立場から明らかにされて

いる。⁽¹⁰⁾

「琴賦」は、楽器である琴の徳を讃えることをモチーフとする作品であるが、琴材となる桐の木が高山にそびえ立つ様子を述べる所から始まる。そして、その木を伐採し、入念に細工して琴に仕立て上げ、その音色の素晴らしさや、それを聴いたことによる効果などに言及してゆくのであるが、旅人が「淡等謹状」を記す時に利用したのは、主に、桐の木が高山に生えている様子の描写と、その木が匠に見出されて琴に作られる部分である。

先学の論に従って、「琴賦」受容の様を確認しておきたい。

①嵇康「琴賦」(『文選』卷十八)

惟れ椅梧の生ずる所、峻嶽の崇岡に託す。重壤を披いて以て誕に載ひ、辰極に参りて高く驥る。天地の醇和を含んで、日月の休光を吸ふ。鬱紛紜として以て獨り茂り、英蕤を昊蒼に飛ばす。夕べに景を虞淵に納れ、旦に幹を九陽に晡す。千載を経て以て價を待ち、寂として神のごとく峙ちて永く康し。……(中略)……

是に於て逐世の士、……茲の梧を顧みて慮を興し、物を假りて以て心を託せんことを思ふ。乃ち孫枝を斲りて、任ふる所を准量す。至人思ひを據べ、制

して雅琴を爲る。乃ち離子をして墨を督し、^f匠石をして斤を奮ひ、夔襄をして法を薦め、般倕をして神を騁せしむ。……(中略)……

^g 伯牙 手を揮ひ、鍾期 聲を聴く。

「淡等謹状」と「琴賦」とを比較してみると、まず、琴娘子の言の冒頭部分の傍線④「根を遙島の崇き巒に託け、幹を九陽の休き光に晡す(託根遙鳴之崇巒、晡幹九陽之休光)」は、嵇康「琴賦」の傍線a「峻嶽の崇岡に託す(託峻嶽之崇岡)」、傍線b「日月の休光を吸ふ(吸日月之休光)」、傍線c「旦に幹を九陽に晡す(旦晡幹於九陽)」を直接の典故として成立していることが知れる。また、琴が椅梧の「孫枝」で作られていることも、「琴賦」傍線d「孫枝を斲りて」と共通する所である。更に、桐であった娘子が匠の手によって琴に作られた(傍線④「偶に良き匠に遭ひ、斲りて小琴に為られぬ」とすることも、「琴賦」の傍線e「制して雅琴を爲る」、傍線f「匠石をして斤を奮ひ」の部分に語られている。

漢文ばかりでなく、琴娘子の歌詠についても、「音知らむ人」(八一〇)の典故と目される伯牙と鍾子期の「音を知る(知音)」の故事が「琴賦」傍線gに見えている。その部分の李善注では、『呂氏春秋』を引いて「知音」の故事が詳述されている。⁽¹¹⁾

想像を逞しくすれば、「言問はぬ木」が夢に現れて對話するということ趣向も、「琴賦」の李善注よりヒントを得ているのかもしれない。李善は、傍線f「匠石をして斤を奮ひ」の箇所注して、「莊子」人間世篇に載る、木工の名人匠石の寓話を抄出している。それは、匠石が無用のものとして顧みなかった櫟の大木が夢に現れて、自らの思うところを匠石に語るといふ話である。

このような影響関係から、従来、旅人の心情は、「琴賦」の作者である嵇康に擬せられることが多かった。嵇康は竹林の七賢の一人であり、仲間の山濤に仕官を勧められた時、「山巨源に與へて交はりを絶つ書」(『文選』卷四十三)を作り、仕官ばかりでなく、山濤との以後の交際まで断わった事から、世俗を超越した生き方をした人間として知られている。そうした所から、旅人の心情についても脱俗の境地として捉えられてきたのである。

しかし、嵇康は、「琴賦」では仕官の是非など問題にはしていない。これは楽器である琴の徳を讃えるという作品である。琴材である桐の木が高山に生えている様子を叙するのに「琴賦」の表現を借りているからといって、旅人が嵇康と同じ生き方をしようとしていたとするのは早計である。同様に、趣向が老荘思想・神仙思想に基づく書物に拠っていることも、旅人が「謹状」で脱俗の意思表示をしている

ことの証左にはなるまい。やはり、結論を急がず、文脈を忠実に辿る必要がある。

さて、琴娘子は、傍線④で高山に自生する桐の様子を描写した後、傍線⑤⑥ではその時の桐の状態について述べている。この部分の傍線⑦「山川の阿に逍遙し(逍遙山川之阿)」、傍線⑧「雁木の間に入出す(出入雁木之間)」という対句の出典については、小島憲之氏に詳細な論がある。

② 「遊仙窟」

俗を免る能はず、跡を下寮に沈めたり。

h 隠れたるにも非ず遁れたるにも非ず、i 鵬鷲の間に逍遙す。

j 吏にも非ず俗にも非ず、k 是非の境に入出す。……

前に資貢を被り、已に甲科に入れるに、後搜揚に屬し、又高第を蒙れり。

③ 潘岳「秋興賦」(『文選』卷十三)

且く衽を斂めて以て歸り來り、忽ち絨を投じて以て高く厲り、……(中略)……

i 山川の阿に逍遙して、人間の世に放曠せん。優なるかな游なるかな、聊か以て歳を卒へん。

④ 盧諶「贈劉琨一首并序」(『文選』卷二十五)

m 木に在りては不材の資を闕き、鴈に處りては善鳴の分に乏し。……匠者時に阿、賓に騾めらるるを免れず。

④『莊子』山木篇（m 李善注所引）

莊子、山中を行く。大木の枝葉盛茂するを見る。伐木者、其の傍らに止まりて取らざるなり。其の故を問ふ。曰はく、「用ゐるべき所無し」と。莊子曰はく、「此の木、不材を以て其の天年を終ふるを得たり」と。夫子、山を出で、故人の家に舍る。故人喜び、豎子をして鴈を殺して之を烹さしむ。豎子請ひて曰はく、「是の一は能く鳴き、其の一は鳴く能はず。請ふ奚れをか殺さん」と。主人曰はく、「鳴く能はざる者を殺せ」と。明日、弟子、莊子に問ひて曰はく、「昨、山中の木は不材を以て其の天年を終ふるを得たり。主人の鴈は鳴く能はざるを以て死す。先生將に何にか処らんとする」と。莊子笑ひて曰はく、「周は將に夫の材と不材との間に処らむとす。材と不材との間は之に似て非なり。故より未だ累を免がれず」と。

氏に扱れば、「逍遙○○之×」「出入○○之×」の対は、

②『遊仙窟』の傍線 i 「逍遙鵬鷄之間」、傍線 k 「出入是非

之境」の対を直接の典拠としている。また、傍線①「逍遙山川之阿」の句は、③「秋興賦」の傍線 l 「逍遙乎山川之阿」に拠る。傍線②「雁木之間」については、④「劉琨に贈るの序」の傍線 m 「木に在りては、鴈に處りては」の「木」と「鴈」の対と、その典拠として傍線 m の李善注にも引かれている④『莊子』山木篇の故事の傍線 o 「材與不材之間」の句に基づいての造語であるとされている。

この『莊子』の「材と不材との間」と、「淡等謹状」の傍線⑤「雁木の間」とがほぼ同義であることから、この部分の桐の木の状態は、材（有用なもの）と不材（無用なもの）の中間、即ち、琴になれるかなれないか分からない、不安定で中途半端な状態であると解されてきた。そして、従来、その状態は「鴈木之間」に出入している己のやり場のない思い¹⁵、「雁木の間」に甘んじている¹⁶等、概ね、望ましくないものとして捉えられ、その状態に対する娘子の心情も「いつになつたらお役に立つことがあろうかと、あてもなく待ち望んでおりました¹⁷」という否定的なものであるとされてきた。更に、それが作者である大伴旅人の心情であると説かれてきたのである。

確かに、「山川之阿」「雁木之間」の典拠である③、④、

④は各々潘岳、盧諶、莊子が自らの生き方について思うところを述べる部分である。それに基づく「淡等謹状」の当

該部分も、桐であった琴娘の状態だけでなく、心情をも表現するものであろう。そこに作者旅人の心情の投影を觀ずるのも良い。後述(次節)のように、中国漢詩文の在り方と照らしても、娘子に仮託して作者旅人が自らの胸中を語っていることは認められる。しかし、その出典に即して考えれば、これらの語句が否定的な意味で用いられているとは考へ難い。

③「秋興賦」は、官途にあつた潘岳が隱遁するに当たり、「且く衽を斂めて以て歸り來り、忽ち絨を投じて以て高く厲り」と高らかに歌いあげる婦田の宣言である。この作品も『文選』に載るものであるが、李善は傍線「山川の阿に逍遙して」に注して、『莊子』逍遙游篇の司馬彪の注「逍遙無為の者は、能く大道に遊ぶなり」を引く。これに拠れば、「逍遙」とは、無為の境地に遊ぶことを意味する。即ちこの句は、俗塵を避けて隱遁した後の、無為の境地に遊ぶ状態を讚美する「秋興賦」のクライマックスなのである。これに続いて賦は、「優なるかな游なるかな、聊か以て歳を卒へん」と結ばれる。潘岳にとって「山川の阿に逍遙」する事は、「優游」たる精神をもたらず最高の状態なのである。

④「莊子」は、役に立たない大木が伐採されずに済み、鳴くことのできない鴈が殺されるのを見て、弟子が、有用

(材)と無用(不材)のどちらに身を置けば良いのか、と問うた。すると莊子は「材と不材との中間に身を置こう」と答えたという話である。莊子は有用・無用という世俗の価値觀の超越を志向し、そういう状態を指して傍線○「材と不材との間」と言っているのである。

④「劉琨に贈る」は、事情あつて劉琨の下を去り、劉琨と敵対する段匹磾の部下となつた盧諶が、旧恩忘れ難くその心中を訴えたものである。盧諶は、④の逸話に基づき、そうした自分を、傍線m「木に在りては不材の資を闕き、鴈に處りては善鳴の分に乏し」と卑下している。そして、敵であつた段匹磾に仕えなければならぬという、その不本意な仕官を「匠者時に阿、賓に驥めらるるを免れず」と言う。盧諶は、「不材」の木や「善鳴」の鴈のように自由の身でいるだけの資質が無かつた。であるが故に、役立つ木が匠に見い出されて伐採され、鳴くことのできない鴈が賓客に饗される料理となつてしまうように、仕官せざるを得なかつたのだと釈明している。つまり、盧諶にとっては「材と不材との間」「雁木の間」に身を置くことこそが望ましい状態だったのである。

以上の③④④から考えれば、それに基づく「淡等謹状」の傍線②「山川の阿に逍遙し」、傍線⑤「雁木の間に入らず」の状態は、例え中途半端に見えようとも、娘子にとっては、

世俗を超越し、無為の境地に遊ぶ望ましい状態であったと解すべきである。

更にそれを旅人自身の心情として捉える時、③の1、④のmがいずれも仕官に対して否定的な意味合いで用いられる語句であることに気づかされる。また、次に見るように、②『遊仙窟』のi、kについても同じ事が言えるのである。

②は、十娘の問いに対して、張郎がその家柄と境遇を明かす場面である。主人公張郎は、漢の張良、後漢の張衡を先祖とする名門の出身だが、今では家運傾き、不本意にも下役人となっており、その不本意な仕官を「俗を免るる能はず、跡を下寮に沈めたり」と述べる。そして、波線h「隠れたるにも非ず遁れたるにも非ず(非隠非遁)」、波線j「吏にも非ず俗にも非ず(非吏非俗)」とあるように、隠遁しているわけでもなく、俗吏になりきっているわけでもないと言う。この「非隠非遁」「非吏非俗」とは、身は朝市(朝廷や市井)に在っても、心は隠遁者のそれであるという「朝隠」であることを示す。傍線i「鵬鷗之間」は、『莊子』逍遙游篇の冒頭に載る、大鵬の大きいなる飛翔を理解できぬ小鳥が笑ったという寓話に基づく語であり、「鵬」が隠遁、「鷗」が俗吏に相当する。同様に傍線k「是非之境」の「是」が隠遁、「非」が俗吏であろう。共に、朝隠としての立場の表明である。もっとも、張郎はこの後、十娘に今の官職を尋

ねられて、「郷試(科挙の地方試験)に首席で及第し、会試(科挙の中央試験)でも優等で合格したため、勅命により地方官となっている。」と誇らかに答えているので、実際には精神的に「非吏非俗」であったかどうか疑わしい。

ただ、旅人が「謹状」を記すに当たり、特にこの部分を典拠としたのは、代々続く名門の家柄に生まれ、不本意にも地方官となっているが、俗吏になり下がっているわけではなく、心は無為の境地に遊ばせているという主人公の姿に、相通ずるものを感じたからではないかとも考えられる。

以上に見てきたように、傍線①「山川の阿に逍遙し」、傍線②「雁木の間に入出す」は、仕官を「俗」として否定し、無為の境地を賞賛する語句から成る。自身の投影である琴娘子の心情を表現する際、こうした語句のみを用いて文を構成している所に、作者旅人の意を汲むことが出来る。つまり、ここで旅人は、自分は仕官するしないという問題を超越しているのだ、という世俗離脱の心情を述べていると考えられるのである。

ところが、それに続く傍線③には「唯だ百年の後、空しく溝壑に朽ちなむことをのみ恐る」とあり、傍線④「偶に良き匠に遭ひ、断りて小琴に為られぬ」と続く。琴娘子の言とすれば、傍線⑤までの部分では、心情的に無為の境地に遊んでいたはずなのに、傍線⑥からは、無用のものとし

て空しく朽ちることを恐れていたと言ひ、匠に遇つたことを喜んでゐることになる。

傍線㊦の「百年之後」は、人間の寿命を百歳とする考え方に由来し、

已にして呂后問ふ、「陛下、百歳の後、蕭相国、即し死せば、誰をしてこれに代らしめん」と。(『史記』高祖

本紀)

右の例と同様に、死後の意である。桐の木が朽ちることを表現するのに、人間の寿命を意味する語を用いるところに、作者旅人自身の姿の投影が確認できる。これを旅人の言とすれば、傍線㊧「良き匠に遭」うというのは、㊦の傍線n「匠者時に眇」と照らし合わせてみれば、仕官したことを意味する。ただ、旅人が「匠」のことを「良き匠」と表現していることからすれば、旅人の場合は㊦の作者盧諶にとってその仕官が本意ではなかったのとは異なり、その「良き匠」と遭えたことを喜び、仕官できたことを喜んでゐるということになる。つまり旅人は、傍線㊨までの部分で、仕官の問題を超越した心情を語りながら、続く傍線㊩からの部分では、「そうした中で唯一恐れていたのは空しく死ぬことであつたが、幸いにも意を得た仕官が出来た」と言うのである。

その上、更に傍線㊪で琴娘子に「君子の左琴を希ふ」と

語らせ、八一一番歌でそれに応える形で「うるはしき君の手馴れの琴にしあるべし」と歌つて琴を房前の下に贈つてゐるといふことは、旅人が房前を君子と認め、琴の娘子の言葉を借りて、その側で仕えたいといふ希望を述べていることにならう。即ち、旅人が帰京の請託を暗に述べたものと理解することができる。

このように、文脈を忠実に辿らうとすれば、旅人の意図は帰京請託にあつたということになる。が、しかし、ここに疑問が生じる。心情的に無為の境地に遊んでゐることを標榜する者が、山中に隱遁する希望を述べるならともかく、仕官を喜んだり、行政府たる都への帰還を依頼することは、思想的矛盾もしくは破綻なのではないかということである。そこで次に、漢詩文の正統である中国の例を参考にしながら、右の点について検討することとする。

二 仕官の希望

中国文学では、伝統的に、もの言わぬ物に自らの姿を投影したり、自らの希望を語らせたりということが、しばしば行われる。『玉台新詠』を繙けば、孤閨を守る妻が、自らを離群の鳥や常緑樹に喩えたりする閨怨詩は多い。⁽¹⁹⁾そして、閨怨のみならず、仕官の上での希望を詩に託すこともあつた。

応場「侍五官中郎將建章臺集詩」(『文選』卷二十)

朝鴈鳴雲中 朝鴈雲中に鳴く

音響一何哀 音響一へに何ぞ哀しき

問子遊何郷 問ふ子何の郷にか遊び

戢翼正徘徊 翼を戢めて正に徘徊すると

言我寒門來 言ふ我寒門より來り

將就衡陽棲 將に衡陽に就いて棲まんとす

往春翔北土 往春は北土に翔り

今冬客南淮 今冬は南淮に客たり

遠行蒙霜雪 遠く行きて霜雪を蒙り

毛羽日摧頰 毛羽日に摧け頰つ

常恐傷肌骨 常に恐る肌骨を傷り

身隕沈黃泥 身隕ちて黃泥に沈まんことを

簡珠墮沙石 簡珠沙石に墮つ

何能中自諾 何ぞ能く中に自ら諾はん

欲因雲雨會 雲雨の會に因り

濯翼陵高梯 翼を濯ぎて高き梯を陵がんと欲す

良遇不可值 良き遇 値ふ可からず

伸眉路何階 眉を伸ぶるに路 何にか階らん

……(以下略)……

右は、建安の七子の一人であった応場の作である。丞相曹操の長子で、当時五官中郎將(皇城の侍衛宿直を掌る五

官・左・右の三署の長官)の要職にあった曹丕が建章臺に宴席を設け、諸官を会集した時の公讌詩である。応場は、不遇な己を雁に喩え、遂に用いられずに終わる不安を「常に恐る 肌骨を傷り、身隕ちて 黃泥に沈まんことを」と述べる。そして、「雲雨の會に因り、翼を濯ぎて高き梯を陵がんと欲す」と、暗に曹丕の推挙を望むのである。

応場は、「問ふ子何の郷にか遊び、翼を戢めて正に徘徊すると」という呼掛けに応えて對話を始めた雁に、自らの心情を代弁させている。作者が對話相手の言葉を借りて自身の胸中を語るといふ手法は、琴娘子に自身の心情を代弁させた「淡等謹状」にも共通する。

また、旅人同様、己を桐に喩える例もある。

司馬彪「贈山濤」(『文選』卷二十四)

茗茗椅桐樹 茗茗たる椅桐の樹

寄生於南嶽 寄せて南嶽に生へり

上凌青雲霓 上は青雲の霓を凌ぎ

下臨千仞谷 下は千仞の谷に臨めり

處身孤且危 身を處くこと孤にして且つ危ふし

於何託余足 何にか余が足を託けん

昔也植朝陽 昔は朝陽に植ちて

傾枝俟鸞鸞 枝を傾けて鸞鸞を俟てり

今者絶世用 今は世用を絶たれ

倅惚見迫束 倅惚として迫束せらる

班匠不我顧 班匠 我を顧みず

牙曠不我録 牙曠 我を録さず

焉得成琴瑟 焉んぞ琴瑟を成すを得ん

何由揚妙曲 何に由りてか妙曲を揚げん

……(中略)……

冀願神龍來 冀願は神龍の來りて

揚光以見燭 光を揚げて以て燭されんことを

これは、博覧をもつて謳われ、『莊子』に注したことでも知られる西晋の司馬彪が、まだ仕官の叶わぬ頃、吏部侍郎として人事を掌っていた山濤に、推挙を求めて贈った詩である。才能を抱きながら世に用いられぬ自分を高山にそびえ立つ桐に喩え、「班匠 我を顧みず、牙曠 我を録さず」と述べる。この「班・匠」「牙・曠」はいずれも人名で、各々木工の名人である公輸班と匠石、音楽の妙手である伯牙と師曠を指す。そして、そういう匠たちに顧みられないために琴に成れず、樂人たちに取り上げられないために音曲を奏し得ないことを「焉んぞ琴瑟を成すを得ん、何に由りてか妙曲を揚げん」と言う。即ち、為政者に顧みられないために仕官が叶わず、相応の働きが出来ないという嘆きである。その上で「冀願は神龍の來りて、光を揚げて以て燭されんことを」と結び、山濤を「神龍」に喩えて推挙を請願

するのである。

仕官以前の司馬彪は、琴にすら成れぬことを嘆く。「良き匠」と出遭つて既に官途にある旅人が、「君子の左琴」となつて妙曲を奏することを希うのとは段階に少し差があるが、それにしても両者の相似は瞭然である。

このような詩が中国の正統文学である『文選』に収められていることは、それらに高い文芸性が認められていたことを示す。「文章は経国の大業」とされる中国では、文芸作品の主題が政治性を有することは、ごく当然のこととして認識されていた。恐らく、仕官の希望を述べること、私的に卑小な依頼とは見なされず、個人が政治的に相応の働きをするのに適しい官職を求めることとして、文芸作品の主題たるに適しいものと考えられていたのであろう。

そのことと関わつて、旅人の琴書献呈の意図を帰京請託とすること(前述A説)に対する批判として、井村哲夫氏に次のような指摘がある。

地方官が中央の顯官に物を贈つて身のふり方の配慮を望んだものであると忖度する、かなり世俗的な解釈もあるようであるが、良き趣味を解する意見とも思われ(20)ない。

確かに、物を贈り、それに付した書簡で帰京を請託した、という見方をする向きもあり、その限りに於いては、「世俗

的な解釈」であり、文芸性の否定にも繋ろう。だが、「淡等謹状」を書簡という形式の文芸作品として捉え、中国文学の伝統に即して考えれば、詩文に個人的な仕官の希望を託すことは、必ずしもその文芸性を害いはいしないのである。換言すれば、仕官の希望を漢文書簡の主題とすることは、文芸的方法として認められるのである。

ここに、旅人の希いも、「君子の左琴」と成るための帰京請託である以上、阿諛追従などではなく、書簡体の文芸作品として述べるに適しい主題であったと解される。

ところで、右の詩の作者司馬彪は、前述の如く『莊子』に注を付けた人物であり、老莊思想は身についたものであつたはずである。また、それを贈られた山濤も、嵇康・阮籍らと共に脱俗的な清談をすることを好んだ、竹林の七賢の一人である。彼らが仕官と関わることに、果して思想的矛盾は無かつたのか、検証の必要がある。何となれば、「淡等謹状」を解する上で、作者旅人に思想的矛盾がなかつたのかという、前述の疑問と通ずるからである。

山濤は、嵇康に仕官を勧めて絶交されたことで知られているが、「朝隱」として身を処していた人物であつた。山水隱遁を至高とする立場から見れば、「朝隱」とは理解に苦しむものであつたらしく、山水隱遁信奉者で、「天台山に遊ぶの賦」(『文選』卷十一)の作者である孫綽は、山濤を次の

ように評している。

山濤は吾の解せざる所なり。吏は吏に非ず、隱は隱に非ず。(『晋書』孫楚伝)

傍線部は「官吏であつて官吏でなく、隱遁者であつて隱遁者でない」の意であるが、これは前節の②「遊仙窟」の張郎の言葉、波線h「隠れたるにも非ず遁れたるにも非ず」、波線j「吏にも非ず、俗にも非ず」と酷似する。山水隱遁信奉者である孫綽は山濤を蔑んでおり、張郎の言にも多少の自嘲が感じられるため、それ自体は決して肯定的な語句ではないと考えられるが、仕官を「俗」としながら官途にある両者が、共に「朝隱」であることは注目に値しよう。

つまり、俗吏に徹するのでもなく、山水隱遁をせずに精神だけを無為の境地に遊ばせる「朝隱」を標榜すれば、老莊思想と仕官とを矛盾なく両立できるのである。

「淡等謹状」は旅人が房前に宛てた書簡である。独詠的な當為でもなければ、複数の享受者を眼前にしての宴席での作でもない。藤原房前という特定の個人に披瀝するための述作である。余人には言行不一致に見えようとも、旅人と房前が互いに「朝隱」として相手を選んでいたとすれば、無為の境地に遊びながら仕官の希望を述べることにについて、二人とも何の矛盾もなく了解できたはずである。

そこで次に、旅人・房前をはじめとする奈良朝の高級官

僚たちの隱遁思想について、考察してみたい。

三 奈良朝官人の隱遁思想

中国の隱遁思想は、夙に老莊哲学と結び付き、時代の変遷に従って諸相を見せるため、一樣ではない。奈良朝官人の隱遁思想を考える前に、まず、中国士大夫の隱遁思想を見ておくことにする。⁽²¹⁾

隱遁とは、そもそも知識階級である士大夫層の処世の一つであり、官吏として自分の考えや行為が全う出来ない時、官僚社会からの逃避として為された行動であった。

中国歴代王朝の思想的基盤であった儒家に於いては、あくまで仕官が前提であり、政治の汚濁などにより仕官を断念せざるを得ないときのみ、隱居することにより仕官を断次の孔子の言葉はそれを如実に物語る。

天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隱る。(論語「泰伯篇」)

こうした考え方に基づき、前漢以前の隱遁は、「仕」を強く意識するものであった。

ところが、前漢末の政治の混乱に乗じて、外戚王莽が王権を篡奪して国号を新と改めた頃から、様相が変わってくる。

是の時、冠を裂き、冕を毀ち、相攜持へて之を去る者、

蓋し勝けて数ふべからず。(『後漢書』逸民伝)

と、あるように、王莽の篡奪行為に義憤を感じる一方、生命の危険をも感じて、官を去り身を隠す人々が激増したのである。保身の為官命の届かぬ山野に隱遁した者の生活は厳しく、「仕」を前提とする儒教思想は苦難に耐える人々の支えとはならなかった。この間隙を満たすものとして、興隆してきたのが老莊思想である。

人為を廢し、「無為自然」を理想とする老莊思想は、隱遁行為に哲学的基盤を与えた。この思想の流行に伴って隱遁自体に価値が存するようになり、官僚社会を「俗」と退け、生命の危険の有無に関わらず隱遁を尊ぶ風潮が生まれてくる。そして晋代には、隱遁讚美の思想が確立するのである。当時、隱遁は山野に於いて為されるべきであると考えられており、「山水隱遁」こそが至高の行為とされた。晋の郭璞は「遊仙詩」に次のように言う。

京華遊俠窟 京華は遊俠の窟

山林隱遯棲 山林こそ隱遯の棲

(「遊仙詩七首」其一(『文選』卷二十一))

前述した東晋の孫綽も、この立場をとる者である。やがて、「山水隱遁」が賞翫の意味を有するようになり、謝靈運に代表されるように、宋代には山水詩の盛行を見るのである。

しかし、思想的には隱遁を志向しても、実際に官僚社会

から隔絶された「山水隱遁」を断行した者は、ごく少なかった。王瑤氏はその理由について、

しかし隱遁生活は、物質的な享受という面からは、どうしても劣る。これが多くの人に軽々しく隱遁生活をやってみようと思わせなかつた原因である。

と述べ⁽²²⁾。それ故に、士大夫にとって、仕官か隱遁かという出処進退の問題は常に切実な問題として存在し、隱遁の願望は文学の重要な主題ともなつたのであるが、氏に拠れば、その問題の解決策となつたのが「朝隱」であつた。

隱遁は高尚な行いであるが、もし隱遁の効用が世を避け身を全うすることだけにあるなら、官殿の中においても「姿は現しても心は藏す」ことができるし、朝廷に在つても世を避けることはできる。「隠れる」ことの利点がある上に、しかも「たらふく食べて安全に世を渡れる」のである。かくして、仕えることと隠れることとの矛盾はなくなり、出処進退の問題は、この「仕えることによつて隠れる」という所に解決の糸口を得たのである。⁽²³⁾

即ち、隱遁の目的が「無為自然」の境地の体得となり、為政者への反発としての意義が消失している以上、身は朝廷や市井に在つても隱遁者として認められるのである。更に、

小隱隱陵菽 小隱 陵菽に隠れ

大隱隱朝市 大隱 朝市に隠る

(王康珩「反招隱詩」(『文選』卷二十二))

というように、「山水隱遁」を「小隱」、朝隱を「大隱」として、むしろ朝隱を尊ぶような考え方さえ現れたのである。こうした朝隱の概念は、顯職に在つた奈良朝官人にとつても、都合の良いものであつたと推察される。

⑤藤原宇合「秋日於左僕射長王宅宴」(『懷風藻』)

遨遊已得攀龍鳳 遨遊 已に龍鳳に攀づること得たり

大隱何用覓仙場 大隱 何ぞ用ゐむ仙場を覓めむ

ことを

⑥同「遊吉野川」(『懷風藻』)

野客初披薛 野客 初めて薛を披り
朝隱暫投簪 朝隱 暫く簪を投ぐ

⑦藤原萬里「遊吉野川」(『懷風藻』)

友非干祿友 友は祿を干むる友にあらず
賓是滄霞賓 賓は是れ霞を滄ふ賓なり

⑧同「暮春於弟園池置酒一首」序(『懷風藻』)

軒冕の身を榮えしむることを慮らず、徒に泉石の性

を樂しばしむることを知るのみ。

右はいずれも『懷風藻』の詩及び詩序である。⑤は藤原宇合の長屋王の詩宴に於いての作であるが、朝隱を「大隱」とする考え方が窺われる。⑥⑦は、仙境吉野に遊ぶ詩である。⑥の「野客」と「朝隱」の対に見られるように、山水詩の影響下にある吉野詩であつてさえ、山水隱遁と朝隱とが等価値となつてゐる。⑦でも、「友」は、作者藤原麻呂と同様に、吉野に出遊してゐる官人であらうが、それが「禄を干むる」ことに専心してゐるのではないとされるのであるから朝隱と考えられる。それが、「霞を滄ふ」と形容される山水隱遁の「賓」と番えられてゐるのである。また、⑧の、「軒」「冕」は各々高位高官に在る者の車と冠を指す。「高位高官に登ることが我が身を榮えしむることとは思わない。ただ泉や石などが私の性を樂しませてくれるということを知つてゐるだけだ」の意である。これは、官途にあつても榮達を望まず、無為の境地を体得した朝隱であることを示すものであらう。

一般に、奈良朝に於ける老莊理解は淺薄であるとされてお^るり、果して官人たちが仕官と隱遁との矛盾に苦しむという過程を経ていたかどうかは定かでない。だが、少なくとも、顯職に在りながら、「山水隱遁」を志向して「山林こそ隱遯の棲」と言うことの愚を避ける、表現上の論理性は有

していたようである。

無論、藤原四子として權力の中枢に在つた宇合や麻呂が實際に朝隱であつたとは考えられない。しかし、少なくとも中国漢詩文の影響の下に老莊思想を標榜する際には、朝隱として自他を遇することにより、その立場を正統化していたことが認められよう。そしてそれは、宇合・麻呂に限らず、彼らと同じ文化圏にあつた房前についても同様であつたと考えられる。

書簡は、その贈答により初めて書簡たり得るのであつて、相手を無視しては成り立たない。旅人は、帰京請託という仕官上の要請を主題とする書簡形式の作品を贈る相手として、要請を受けて然るべき地位に在る房前を選んだ。都の顯官である房前は、恐らく文芸上朝隱を尊ぶ文化圏に在つた。だからこそ、旅人は、房前と書簡の贈答をするに当たり、その立場を尊重して房前を朝隱として遇し、自らも朝隱としての装いを取つたものと理解される。

結

「謹状」執筆時の旅人は、決して恵まれてゐるとは言い難い状況に在つた。その旅人の心理を察し、書簡から何らかの思想を読み取ろうとする態度が誤りであるとは言えない。だが、「淡等謹状」が書簡体の作品であることに留意すれ

ば、そこに、贈答相手との関係性に負うところの多い、書簡ならでの装いが存することも考慮すべきであろう。旅人と房前の場合、それが自他を朝隠として遇することだったと考えられる。そして、それは文芸上の方法であつて、無論、旅人と房前の実際の処世態度に直結するものではない。

同様に、「淡等謹状」の主題が帰京請託であるとしても、琴書献呈が、帥再任を回避するという機能を期待しての行為であつたと結論することはできない。中国文学の伝統に則つて、政治的要請を主題とした作品を創作する、という文芸上の試みとも考えられるからである。

しかし、「淡等謹状」を文学作品として捉えようとする時、重要なのは、旅人の処世や書簡の政治的機能ではない。作品論の立場から言えば、「淡等謹状」の特異性は、中国文学の伝統の下、政治性の強い問題を文芸の主題とした、という点にある。作家論の立場から言えば、本作品から確認できるのは、旅人が、中国文人を規範とし、文芸性の高い書簡によつて政治的要請を行うという、文人官僚として身を処そうとしたということである。「淡等謹状」の文学的意義は、如上の点にこそ求められると言つてよいのではないか。

注

(1) 中西進氏「文人歌の試み」(『万葉と海彼』平成二年四月)等。

(2) 中川収氏「藤原四子体制とその構成上の特質」(『奈良朝政治史の研究』平成三年五月)、芳賀紀雄氏「終焉の志―旅人の望郷歌」(『女子大國文』七八、昭和五〇年一月)、藏中進氏「日本琴の歌」(『万葉集を学ぶ 第四集』昭和五三年三月)等。

(3) 五味智英氏「大伴旅人序説」(『万葉集大成 10』昭和二九年五月)、高崎正秀氏「大伴旅人」(『高崎正秀著作集 第三卷』昭和四六年五月)、北山茂夫氏「憶良、旅人、家持の世界」(『続万葉の世紀』昭和五〇年十一月)、佐藤美知子氏「帥時代の旅人とその周辺」(『論集日本文学・日本語 1 上代』昭和五三年三月)、原田貞義氏「旅人と房前―倭琴献呈の意趣とその史的背景―」(『万葉とその伝統』昭和五五年六月)、村山出氏「左琴の希い」(『憂愁と苦惱 大伴旅人・山上憶良』(昭和五八年一月)、菅野雅雄氏「大伴旅人試論―神仙説へのかたむき―」(『美夫君志』三二、昭和六一年四月)、梶川信行氏「日本琴の周辺―大伴旅人序説―」(『美夫君志』三三、昭和六一年四月)、増尾伸一郎氏「君が手馴れの琴―考―長屋王の変前後の文人貴族と嵇康」(『史潮』二九、平成三年七月)等。

(4) 「長屋王首班体制から藤原四子体制へ」(『律令政治の諸様相』昭和四三年四月)

(5) 注3 高崎氏論文

(6) 注3 北山氏論文、注2 芳賀氏論文、注3 佐藤氏論文等。

この他、歴史的考察に拠らず、出典論的立場から「淡等謹状」と「琴賦」を比較してA説をとる古沢未知男氏の論(「淡等謹状」と「琴賦」)〔漢詩文の引用よりみた万葉集の研究〕昭和四一年七月)等もある。

(7) 市村宏氏「大伴旅人の生き方」(「続万葉集新論」昭和四七年五月)、注1 中西氏論文等。

(8) 注3 原田氏論文、注3 梶川氏論文等。

(9) 注2 蔵中氏論文、注3 増尾氏論文等。

(10) 注6 古沢氏論文、小島憲之氏「遊仙窟の投げた影」(「上代日本文学と中国文学」昭和三九年三月)等。

(11) 傍線部g 李善注所引「呂氏春秋」

伯牙琴を鼓し、鍾子期之を聴く。志泰山に在れば、鍾子期曰はく、「善きかな巍巍として太山のごとし」と。須臾にして志流水に在れば、子期曰はく、「湯湯として流水のごとし」と。子期死して、伯牙琴を破り、絃を絶ち、終身復び琴を鼓さず。以為らく、世に音を賞るもの無しと。

(12) 「莊子」人間世篇

匠石帰る。樗社、夢に見はれて曰はく、「女は將に悪にか子を比えんとするや。若は將に子を文つ木に比えんとするか。……此れ其の能あるが以に其の生を苦しむるものなり。故に其の天年を終へずして中道

に天にす。自ずから世俗に措ち撃かるるものなり。物は是れのごとくならざるは莫し。且つ予は用ふべき所なきを求むること久しかりき。幾んど死せんとして乃ち今、之を得て予が大なる用ちを為せり。子をして用つこと有らしめば、且つ此の大なるを有つことを得んや。……」と。

(13) 注3 原田氏論文、注3 村山氏論文、注1 中西氏論文、注3 増尾氏論文等。

3 増尾氏論文等。

(14) 注10 小島氏論文

(15) 注2 蔵中氏論文

(16) 注3 梶川氏論文

(17) 『万葉集全注 卷第五』

傍線㊸「長く煙霞を帯びて」、傍線㊹「遠く風波を望みて」については、直接の典拠を挙げることはできない。しかし、「煙霞」は王勃等の初唐詩に、老莊思想の影響下に山水に遊ぶ際の詩句として頻出する語であり、それを「長帯」するとは老莊的な無為の境地に在ることを意味する。また、「風波」は「莊子」人間世篇の「言は風と波のごときなり」に基づくとの論(注10 小島憲之氏論文)があり、それを「遠望」するとは、人為の世界から脱却していることになる。傍線㊸㊹も、傍線㊸㊹と同様の性格を持つ句であると言えよう。

(19) 曹植「雜詩五首」其三(卷二)、陸機「雜擬七首」其三

(卷三)等。

(平成五年九月十日稿了)

- (20) 井村哲夫氏『万葉集全注 巻第五』
- (21) 中国の隠遁思想については、王瑤氏「隠遁を願う風潮について」(『中国の文人』平成三年一月)、斯波六郎氏「中国文学における孤独感」(平成二年九月)、小尾郊一氏「中国文学に現われた自然と自然観」(昭和三二年一月)、小尾郊一氏「中国の隠遁思想」(昭和六三年二月)等を参考にした。
- (22) 注21王氏論文
- (23) 注21王氏論文
- (24) 辰巳正明氏「自然と鑑賞」(『万葉集と中国文学』昭和六二年一月)等。
- (25) 小島憲之氏「万葉集と中国文学との交流―その概観―」(『上代日本文学と中国文学』昭和三九年三月)等。
- 引用本文は、『万葉集』は日本古典文学全集、『懐風藻』は日本古典文学大系、『文選』は全釈漢文大系、『莊子』は中国古典文学選、『遊仙窟』は岩波文庫に各々拠ったが、私に改めた所もある。

〈付記〉

本稿は、平成五年七月の上代文学会例会に於ける口頭発表を基にしたものである。席上、貴重な御意見を賜った諸先生方に、篤く御礼申し上げます。